
伝説の風俗嬢

メタかつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の風俗嬢

【Nコード】

N5868D

【作者名】

メタかつ

【あらすじ】

伝説の風俗嬢、長谷川美奈。この業界で彼女を知らない人はいない。彼女の人生とは？彼女の生き様とは？風俗という仕事に対する思い…とは？

第1話◆美奈と風俗◆

皆さん伝説の風俗嬢、長谷川美奈（仮名）をご存知か？

この物語は私の妻である長谷川美奈の人生：生きた証を記す物であるとする：なるべく忠実に書いていこうと思うが、なんせ書き手が素人の私であるから読みにくい文面があるかもしれない：文面、文法の間違ひは大目に見てもらいたい：

今や障害者、高齢者専門のデリバリーヘルス『憩いの里』のオーナーである彼女がどおしてここまで成り上がることが出来たのか：そこには彼女の志し、戦略がある：

この物語をよんで人間とはなにか、成功のヒントを少しでも見出し、できれば光榮に思う。

そしてこういう考えを持った風俗嬢がいた事を知ってほしい：風俗でしか癒されない人間もいることを知ってほしい：風俗でしか生きれない人間がいることを知ってほしい：風俗嬢の偏見が少しでもなくなっってほしいと心から思う：

物語は今から10年前までさかのぼる：

10年前：

きらびやかな店内である店内にはシャンデリア、テレビ、絵画、ステンドグラスが飾られ高級ホテルを思わせる：グラスはマイセンだろうか？

ここは岐阜のゾーブ街、『シャトレーゼ』の店内である。巷では中

級ソープと知られ1回で5万のお金が飛ぶ。

ソープについての説明を少々：

ソープランドのシステムは基本としてお客が入浴料を店に払い、嬢にサービス料を払う。サービス料は入浴料の2倍程が多いようだ。これが嬢の取り分になるわけだが：

なぜそのようなシステムなのか？

知っての通り本番行為は本来なら売春に当たるのだが、このシステムなら店側はお客に入浴料として風呂を提供しているだけでサービス料としては貰ってはいない。つまり嬢が本番行為をしても店側は風呂を提供しているだけでサービスについては関与していない：と言ったところだ。だからソープでは入浴料しか書いていないのだ。

ボーイが威勢の良い返事で美奈を読んだ。

「ゆうかさん、フリーのお客様ご指名入りましたあ！」

「はい」

ゆうかとは美奈の源氏名である。当時、美奈は17歳であったが大に人びた風貌から年上によく見られた。勿論、店側は未成年であることは知っていたが暗黙の了解で雇ってくれた。当時のソープでは良くある事だ。

美奈は水色のドレスに着替え化粧もバッチリ決まっている、右手にはローション、コンドーム、大人のオモチャなどが入った籠を持つ。美奈は客によって服装、化粧を変える。客の好みに合わせて化粧を濃くしたり、アイシャドウを塗ったり、私服でお出迎えする。今回の客は新規と言うことで一番当たり障りのない格好にしたようだ。

美奈はエレベーターの横に立ち閉まらないように手を添えている。

「あっ…どうも」

Gパン、Tシャツ姿の小太りの男である。年は若そうであるが遊び慣れた雰囲気はなくオロオロと落ち着きがない。おそらく風俗嬢にしか相手にされない寂しい男なのだろう。まあ美奈にとってはこういう男こそ金となる木に見えるのだが…

2人は手を繋なぎながら部屋に入った。美奈は部屋に入ると三つ指を立て挨拶をする。

「今日是指名いただきありがとうございます」

美奈は男の顔を見る。男は場を悪くしたような表情で顔を逸らした。すでに股間ははちきれんばかりに膨張している。普通のソープ嬢ならここで即即で行くのだろうが、さすが美奈である。笑顔で男をソファアに座らせコーヒーを出した。こういう客はまず緊張を和らげることに限る。美奈は熟知しているのだ。

男は最初は緊張して会話もままならなかったが徐々に心を開け美奈に自分の事を話し始めた。

「ゆうかさん…恥ずかしいけど僕はこの年で童貞なんです…女の人に縁がなくて…この顔で口下手だから仕方ないのかもね…」

「そんな事ないですよ、回りの女性が見る目がないだけです…私が保証します」

「…ありがとうございます」

「…キスしていいですか？」

美奈は男の手を握り目を潤ませている：男にとっては演技など思ってもよらないだろう。男は美奈の手の内に泳がされているのだ。

「ゆうかさん：」

「美奈って呼んでください：美奈が本名なの」

完璧である。風俗嬢が本名を教えることはあまりない。本来客も嬢も言う必要もないのだから。本名を教えることによってお互いがより親密になるのだ。

美奈は男の服を少しずつ脱がす。ここまでで30分はかかったが想定範囲内である。

男にとっては夢の時間が流れる：

美奈も甘い吐息を出して悶えている：

体が痙攣し汗がにじみ出ている：

美奈が恍惚の表情で男を見上げる：

全ては演技である！美奈は自分の意志で体をコントロールしているのだ：ここまで来たら職人技と呼んでもいいだろう。

そして夢の時間が終わりを告げる。美奈は名刺を恥ずかしそうに渡す。

そこには：

『今日はどうもありがとう。凄く私自身元気がでたし嬉しかった：

お互い無理はしないようにネ♪○○○○docomo.ne.jp』

男は驚いたようにアドレスを見た。美奈は照れながら言った。

「良かったらメールしてください…本当今日嬉しかった…」

2人は口付けを交わし抱き合った…これで男は美奈の虜だろう大金をはたいて美奈に会いに来る…バカな男である…

美奈は男と別れバックから一冊のノートをだす。このノートに客の情報記入するのだ。次回からこのノートを参考に接客するわけである。

風俗に勤めていると色々な人間がわかる。会社の社長であったり、こじきであったり、変態であったり本当に色々な男と出会う…当時、美奈は17歳であったがそれまでの人生は悲しいものだった…

そして美奈はある男と出会うこれが人生の転機となるのだが…

第2話◆記憶のない少女◆

「う…うう…」

「いや…やめて…」

「嫌あああああああああ！！！！」

「……………」

「……………」

長谷川美奈は漆黒の闇の中目を覚ました。満月の光だけが彼女を照らしどこか妖艶な雰囲気すらただよわせている。脂汗が頬を濡らし肩で息をしている…時計を見たら午前二時を回ったところだった。

「……………」

「…夢…またあの夢だ……………」

夢の中で美奈はある男に追いかけられていた。顔に覚えはない。中年を過ぎたような男は笑いながら美奈を追いかける。右手には中華包丁のような刃渡りの長い刃物を握り締めている、美奈は必死になっ

って逃げる…
助けを求めても周りの人は血だらけで既に息をしていないようだ…
美奈は男に捕まる。瞳には太陽の光に反射した刃物が見える…次の瞬間

夢は終わる。

目を覚ますのだ…

毎日と言っているくらいこの怖い夢を見る…同じ夢を何度も見ると言うことは小さい頃何らかのトラウマがあるのかもしれない。だが美奈に確かめるすべはない…なぜなら美奈の少女時代は存在しないのだから…

分かりやすく言えば少女時代の思い出がない…つまり…

記憶がない…

美奈にある記憶はこの岐阜のソープ街、シャトレーゼでの記憶だけだ。住んでいるマンションだって店側が用意したものだ勿論一人暮らしである…

この少女の過去に何があったのか？今は知る由もない…のだが…

翌朝、美奈はジーンパン、Tシャツ姿でマンションを出る。おさげ髪で歩く美奈はどこか幼さを残しているが人を惹きつける魅力があるように思える電車で10分、ソープ街が見える美奈の働くお店シャトレーゼは駅からもとても近い。南出口を出れば目の前に豪華な外見をした店が見えてくる…シャトレーゼに入る彼女を学生達は偏見

のまなざしで見ている…

「ゆうかさはおはようございます！」

「…おはようございます…」

美奈は店にはいると軽くボーイに挨拶し部屋に入る。美奈はすでに自分専用の部屋プレイルームを持っている。ちなみにゆうかとは美奈の源氏名である。

美奈は部屋に入るとまず部屋の掃除をする。ベッド、灰皿、お風呂…埃ひとつないまで磨き上げる。そして冷蔵庫の中身のチェック、バスタオルの準備…美奈の部屋は数あるシャトレーゼの部屋の中でもダントツで綺麗である。全ての準備が終わるまで1時間はかかる…

すでに待合室には数人の客が待っている。すべて美奈の客である。店の開店と同時に部屋の備え付け電話になる…

「ゆうかささんご指名の佐々木様がお見えになりました…」

「分かりました。10分後に向かいます」

「はい、頑張ってください！」

美奈は一冊の学生ノートを開けた。『情報収集ノート』である。

そこには…

佐々木太郎（50）

喫茶店『HML』のオーナー。巷ではヘビメタ喫茶とも呼ばれてい

て重度のアホ。

常に全身白塗り、トゲトゲヘビメタスーツで着飾り救いようのない男。

プレイ中も白塗りにこだわり嬢にも白塗りを薦めるので最初から白塗りにしたほうが得策のように考えられる。

なおマット、風呂は白塗りがとれるという理由から拒否する事多し…

プレイは陰部に野菜を挿入するのを好むので心すべし…

っと書いてある。美奈は深いため息をついた。正直接客などしたくない…これから起こる行為を想像し苦痛で顔が歪む…嫌で嫌で仕方がないのだ。それでも接客をしなければいけない風俗嬢とは辛いお仕事だ。どんな男でも笑顔で接客しなければいけない…本心を悟られてはいけない…

風俗嬢とは…

俳優なのだ…

美奈はエレベーターの前で佐々木を待つ。いつもの可愛らしい美奈ではない。全身白塗り、でトゲトゲスーツを身に纏っている。化粧物としか思えない姿である。美奈はもう一度深いため息をつき舌打ちをした。壁の向こうから不気味な影が近づいてきたようだ。美奈は眉間にシワをよせる…

予想通り佐々木は全身白塗りで登場した。髪は真っ赤に染まりトゲのついた皮ジャン顔中にピアスをつけている…見つめ合う2人…全身白塗りの2人が見つめ合っている。不気味としか言いようがない。すると佐々木は大きな口を開けた…

「ギシャアアアアアアアアアアアアアア！！！！オハヨーゆうかさん…ハアハア…今日も素晴らしいDES」

佐々木は突然奇声を上げ美奈を凝視する。美奈の顔は佐々木の唾液でベトベトになっている。

「佐々木さん…会いたかったわ…今日もかわいがってくださいね…」

「ハアハア…」

「ハアハアハア！」

「ゆうかああああ！キシシャアアアアアアアア！！」

化け物の奇声が店内に木霊する。ボーイの痛々しい表情をするが、どおすることもできない…この百分間、長谷川美奈は化け物の女になるのだ…

化け物は美奈をベッドに押し倒し欲望の限りを尽くす。美奈の体は化け物の行為に必死に反応する。体中の液体という液体が流れ落ちる。2人は奇声とも呼べる声をあげつづける。

そして…

野菜は挿入された：

行為がエスカレートすればするほど美奈の体は反応する。勿論本能ではなく演技だ。佐々木にとっては天国のような時間、美奈にとっては地獄のような時間：

美奈はこの地獄のような百分ただただ過ぎるのを耐え続けなければならぬ：

知らない男とセックスして楽しいと思いますか？気持ちいいと思いますか？本気で喘いでいると思いますか？風俗とはそれが商売なのです。

高いお金払ってるから何してもいい？

客が帰った後の嬢の顔を見ることがありますか？

嬢を玩具だと思わないでください。性の玩具だと思わないでください。

風俗嬢も普通の女性なのです。

美奈は佐々木が帰った後ベッドに座り一人涙を流した。その時：

ピピピ！ピピピ！

「はい」

「あっゆうかさん…え〜と、次のお客様なんですけど…」

「……………」

人生にリスクファクターがあるとするなら、この時だったかもしれない…

第3話◆岡田和也と言うお客…◆

「障害者ですか？」

「ええ…大人しそうなお客様なんですが両手足に障害があるようで……嫌ならお断りしましょうか？」

美奈は障害者に対して接客をしたことがない。極道から会社社長、政治家まで接客したことはあるが障害者の接客はしたことがない。それどころか障害者を見たことさえもなかった…

今は障害者の性は割とオープンになってはいるがこの時代は障害者の性はタブーとさえ言われている時代である。まして障害者が風俗など…考えられなかった。

美奈は困惑した。プロとして自分を指名してくれたのだから接客をするか…どうするべきか。正直どう接客したらいいかわからない…美奈は受話器を持ったまま何も答えられずにいた…

「あの…無理ならこちらからお断りしましょうか？」

「……………」

「あの…ゆうかさん？」

「…いや…接客します…今準備をします」

美奈がこのとき接客を了承したのはプロ意識からきたのかは今と違ってはわからない…

美奈は受話器を置き、すぐに全身白塗りの化粧を落とす。どうい

服装、化粧にするべきか？まあ初対面であるのだからなるべくナチュラルにするのが得策だろう…

青いドレス、白いハイヒール、化粧はなるべくナチュラルに心掛けた。いつもの新規の顧客を迎えるスタイルである。

美奈はエレベーターのドアに手を添えお客を待つ…どういうお客なのか…どの程度の障害なのか全くわからない。あるいみ全身白塗りの佐々木を待つときより緊張する…

『……………』

『……………』

『来る！』

壁の向こうから影が大きくなる。人の影には見えない。まるで大きな蜘蛛が地を這って来るようである…本当に人なのか？

『……………』

影が更に大きくなる。美奈の緊張も高まる。

『……………』

そして床を這うように手が見えるそして横顔、胴体と続く…客はまるで蜘蛛のように地を這って美奈に近ずいてきたのだ。手足を見ると極端に細く捻れ内側に曲がり固まっている。なるほどこれでは歩けない…

美奈は動揺し体が動けない。正直接客などできるのか？今までどん

な客でも接客する自信はあった。でもこの客は：同じ人間とは思えなかった：

そして客は美奈の目の前まで来て顔を上げた。色白で彫りの深い均整の取れた顔である。顔だけならタレントにもなれるような美男子の顔である。しかし体とのギャップでより一層不気味に見える：

「初めてまして岡田和也です：

「あっ：は、はい！こちらへどうぞ」

美奈は岡田と言う男を見ることは出来ない：初めて障害者を見た。第一印象は同じ人間とは思えなかった：

2人は会話無く、無言で歩く：美奈はドアノブに手を掛ける。軽く深呼吸をする：動揺を隠せないでいた：

「お入りください：あっ：！」

美奈は更に動揺した。なぜなら後ろにいるはずの岡田がいなかったからだ。岡田はというと美奈の遙か後ろから地を這って必死に近づいて来る。顔はどけか悲しげに見える：

「ご、ごめん：早く動けないから：ハアハア：」

「い、いえ：私の方こそごめんなさい！ではどうぞ」

2人は部屋に入るとソファに座った。会話もない。何を話したらいいかわからない。重い沈黙だけが2人に流れている：

「やっぱり障害者の人はこういったお店はこないものなんですか？」

岡田は言った。どう切り返すべきか：美奈はわからない。情報収集ノートには書いてはいない：ただこの苦痛とも呼べるような時間が

過ぎ去ってくれる事を望むのみだ…

「じゃあ服を脱ぎましょうか」

「はい…」

「……………」

「……………」

黙々と服を脱ぐ美奈、岡田はただただ見ていだけである。美奈がブラジャーを脱いだとき岡田が何も脱いでいないことにきずいた。

「あの…脱がないんですか？」

「……………」

「いや…脱げないんです…ひとりじゃ…」

「あつ、ごめんなさい」

美奈はきずいた。確かにこの体じゃ1人で服を脱ぐことも出来ないだろう。考えてみたら1人で風呂に入ることもし出来ないだろう。何も出来ないんじゃないか？この岡田和也という男はどう生活しているのか…まあ美奈には関係ないことだが…

美奈は岡田の服を脱がすのにえらい戸惑った風呂場についたのはいいが1人で風呂に入ることには出来ない。美奈は岡田を抱えるようにして風呂に入れた…

「ごめんね…」

「気にしないでください…」

この百分間で何度同じ事を言っただろうか？岡田は何度もごめんね…と言った。そしてこの日、岡田は一度もイク事はなかった…

「今日はごめんね…」

「気にしないでください…」

「……また来てもいいですか？」

「………はい」

「そうですか…」

帰り際、岡田頭を下げその場を後にした。目には半分涙を浮かべて。この涙の意味をこの時の美奈は分からなかった。

この日初めて美奈は名刺を渡さなかった。どんな客でも今までなら名刺を渡していた…忘れていたわけではない。

「もう、お店に来ることは無いだろうなあ…」

美奈がポツリと呟いた。美奈にとってお店のお客は金づるでしかない。お客の好みに合わせて接客するのはこの為だ。風俗なんてそんなものだ…男など金儲けの道具でしかない…美奈は情報収集ノートを開けた。

岡田和也

障害あり…

ノートに記入する。他の客はびっしり情報を書いているが…この岡田という客は書きようがなかった…

なぜなら

何も知らないのだから…

そして美奈は最後にこう書いた。

『もうお店に来ることはないと思う』…つと。

第4話◆再会◆

「感じるか雌豚あ！」

「うっギャオ！は、はい感じますうー！は、激じぐう！ギボヂイー
ー！」

「おらあおらあ！淫乱の雌豚があ！」

「ギャボーーイグググー！ー！ー！ー！」

部屋内には人の物とは思えない絶叫が木霊する。長谷川美奈である。全身は汗にまみれ液体という液体が吹き出ている。陰部は男の二の腕が肘のあたりまでねじ込まれている。美奈の絶叫をあざ笑うように激しく腕を上下に動かす。すでに腕は美奈の愛液でグチャグチャである。男は美奈の反応を見て更に腕の動きを強める。

「豚があー！俺様は豚とは違うんだ！汚いアソコに入れてやるだけでも光栄に思え！雌豚あ！」

「は、ハイー！これで私も少しは頭が良くなりますー！ギャアアアアアアアアー！ー！ー！ー！ー！」

男はこれまでにないような力で腕を動かす美奈は顔を上下に降って悶えている。次の瞬間美奈の動きが止まる。

「カハア！」

「……………」

「……………」

「ん？イキやがったか…この豚…」

美奈は目の焦点が定まらず陰部からは愛液が噴水のように溢れでている。全身は痙攣し男の呼び掛けにも反応はない…男は美奈の姿を満足そうに見下ろしひとりで服を着替え部屋を出た。

ボタン…

「……………」

「……………」

「……………」

「お前が豚だよ…」

1人残された美奈は1人シャワーを浴びる熱心にまるで汚れた物のように自分の体を洗う。涙もシャワーで流れ落ちる。全ては演技である。美奈は女性のイク時の身体変化さえ意のままに操ることが出来る。

美奈は服を着替えるとボールペンを持ち情報収集ノートを開けた。ペラペラとページをめくる。今接客した男のページで止まる…

福口信三（79）

政治家。現役の内閣総理大臣。常に自分第一に物を考える所あり。女性を玩具としか見ていない。極度のサディストであるがインポテツでもある。奥様との関係が上手くいっておらず、ストレスを風俗嬢にぶつける最低の男であるが金は持っているので上客である。

美奈はまるでゴミを見るような目をしている。そしてこう書き加えた。

『殺してやりたい』

本心である。自分を見下し玩具としか見ていない福田信三を殺したい。そして美奈は何気なく次のページを開いたそこには：

岡田和也

障害あり。

もう来ることはないように思う。

「……………」

「……………」

「岡田…和也…」

もう来るはずのないこの障害者が美奈は妙に気になる。接客が終わるといつも岡田和也とかかれたページをめくってしまう。この時美

奈は岡田に対してどういった感情を抱いているのか自分自身も分かっていなかった：

確かに最初はもう来てほしくない…と思った。正直、接客の仕方が分からなかったし、明らかに金を持っていないと思った…だから名刺を渡さなかったのだ。この時は会いたい、と言うより少し気になる存在と言うのが正直な所だった。

そして初めて岡田と会ってから1ヶ月がたった：

この日も美奈は早朝から出勤し部屋の掃除をしている。もう日課となっている。今日も自分は男共に玩具にされるのか…そんな事を考えていると備え付けの電話がなった。ボーイからである

「あつゆうかさん、おはようございます」

「おはようございます

指名のお客様ですか？」

「は、はい…そうなんですけど…」

「……？…何かあったんですか？」

「実は…前に来た障害者のお客様でして…あの…お断りしましたか？」

美奈は信じられなかったまた会いに来てくれるなんて…もう会うこ

とは思っていないのに：美奈は自然と笑顔になる。

「すぐに準備します！」

美奈は念入りにメイクをする。服装は前に会った時と同じの青いドレスである。美奈は10分程で準備を済ませエレベーターの前で待った。

今まで有名俳優や会社社長、医師、弁護士など男としても勝ち組と呼べるような人物に会ってきた。だが一度も、もう一度逢いたいなと思ったことはない：彼らとは仕事上の付き合い以外何物でもない：ただの金づるとしか見ていない。だがこの岡田和也と言う障害者は違った。初めて逢いたいと思っていた：もつと岡田和也を知りたかった：

エレベーターで待つ美奈は緊張を隠せない：だが最初に会った時の緊張感ではない。どこか期待と不安が混ざったような緊張感だ。正直こんな気持ち初めてだった：自分自身よくわからない……

美奈は一度深呼吸をした。胸の音がドキドキと聞こえてくる：どうなってしまったのか？

そしてスッと目を閉じまた深呼吸をする：一度、二度、三度……

「……………」

「……………」

『よし、落ち着いてきた…』

美奈は自分自身に言い聞かせるように心の中で呟いた。落ち着いた頃を見計らって目を開いた。そこに……

『!』

「……あのくどおしたんですか？目なんか閉じたりして」

すでに岡田が来ていた。岡田は目を丸くしてキョトンとしている。
美奈の緊張は最大級に高まった

「えっ？あついやくはじめまして！じゃなくてお久しぶりですー！
美奈ですー！」

「えっ？ゆうかさんじゃないの？」

「あっ：はい？間違えましたゆうかですうー！美奈は本名でしたー
！」

岡田は笑った。美奈もつられて笑う。

「なんか前と雰囲気違いますね？本名の美奈ちゃんって呼んでも大丈夫ですか」

「えっ美奈！こ、こ光荣です！雰囲気？ち、違いますか？えっ？そんなことな、な、無いです！私落ち着いてますー！」

「アハハハハ！明らかに落ち着いてないよー！面白いなあ：じゃあ行こうかあ？」

「は、ハイー！行きましょう！」

美奈と岡田は一緒に部屋まで移動した。前回の時とは違い美奈は岡

田の歩くペースに合わせている：会話は無いが岡田はニコニコと楽しそうである：それが美奈にとっては嬉しかった：2人は部屋に入るとソファ―に座り軽く挨拶をした。

「美奈ちゃん、なんか雰囲気違うね～なんか明るくなった気がする：」

「そ、そうですか？あの岡田さんはよくこういうお店は来るんです？」

「いや：初めてだよ」

「そうなんだ：」

美奈の顔が真っ赤に染まる。美奈はプレイどころではなかった。岡田に触れるだけで胸が苦しくなったりする。岡田もソープのプレイを求めずただ百分間会話を楽しんだ。この時間が永遠に続けばいい。2人はそう思っていた：

岡田には親がいないらしい、物心ついたときから施設で生活していた：と言っていた。お袋の味は施設のカツ丼だそうだ。

親を知らない岡田と親の記憶がない美奈：何か通じる物があったのかも知れない：

美奈は初めてこの百分間が短いと思った。帰りに名刺を渡した。夢のような時間が終わる。

「美奈ちゃん今日はありがとね！楽しかった！」

「うん！絶対メールしてくださいね！」

「バイバイ！」

「……………」

「……………」

美奈は岡田の姿が見えなくなるまで見送った。

「私になにか変だ…」

美奈はソツと呟いた。まどきドキと胸の鼓動が聞こえたのだった…

第5話◆本当の自分…◆

初めてだったこんな感情…

自分は商品でしかない店の商品でしかない…

そして男は道具でしかない…

ずっとそう思っていた…

一般女性が知る家族に対する愛だの、男性との恋心だの何も知らない…自分はソープでの記憶しかない…

そして自分が何者かも分からない…正直、長谷川美奈も本名かもわからない…

この生活がこれからもずっと続ものだと思っていた…一般女性が知る感情を持たぬまま

自分は岡田和也が好きなのかもしれない。岡田と逢いたいと言う気持ちに日に日に強くなる…正直他の男の体を触りたくない。自分は岡田だけの物になりたい…

美奈は毎日のように岡田と電話した。どうでもいいことでも話した…そしていつしか外で会うようになった…

そして…

自分が何者なのか知りたかった。何故ソープ街にいたのか知りたかった…

手掛かりに成るものがあるとすれば夢である。あのおぞましい夢だ。あの刃物をもった中年男性に襲われる夢…周りの人達は血だらけで

達磨のように転がっている…あんな夢を何度も見る…自分の過去に関係しているとしたかおもえなかった…

夢はどこが舞台なのか？もし美奈の過去に関係しているのなら夢の舞台が有るはずだ。今まで夢の中の男に必死に逃げる自分…夢は何を意味しているのか知りたかった。

夜、美奈は岡田に電話した。なんの会話をしたかわ覚えてはいない、ただ明日会う約束をしたことだけは覚えている。

美奈はベッドに横になりゆっくりと目を閉じた…過去を知る手掛かりが夢しかないのなら。夢に向き合うしかない…刃物をもった男の顔を見るのだ。そして夢の舞台を特定できる物を探すのだ…美奈は薄れゆく記憶の中で思った…

『……………』

『……………』

『……………』

『ゴツ…』

『ぎゃうア…』

『ぎしゃアウお…』

『ギャシャアアア！』

美奈は目を見開いて逃げる。地面は血で染まっているのか真っ赤な染みのような物が見える…ここがどこなのか？空は薄暗くなっている。夕方を回った時間帯かもしれない…

『キャメラアア！！』

男は奇声を上げて走っている…どこか楽しげでさえある。髪は短髪、上下真っ白なポンチヨのような服を着ている…どこかの宗教と関係しているかのような服装である…右手には刃渡りの長い刃物が光る…

この男はだれなのか？

ここはどこなのか？

わからない…

美奈は走る。右手に大きな建物が見える。歩道橋、街頭…田舎では無いことは確かなのだが特定出来る物は見当たらない…

『ここはどこなの？』

美奈は歯を食いしばり汗を流し走った。路上には数人の血だらけの死体が見える…この男が殺したのか？

右手には大きな道路が見えるのだが車は通っていない…人もいない…

男が近ずいてくる…

『カメラアアア！』

まだ夢を終わりにできない。ここがどこなのか特定できていない…それにしても大きな道路である片側5車線はありそうだ…

『？』

『公園…』

ふと右手を見ると森に囲まれたような公園が見える…かなりの規模のように見える…どこの公園なのかわからないが…

噴水…

『……………』

『私はいったいだれ？』

美奈が後ろを振り向いた時だった。男は美奈の肩をつかみ右手を振り下ろす…

街頭の光に反射した刃物はどこか美しささえも感じられた…

『……………』

『……………』

「ハア…ハア」

夢が終わった。いつもと変わらない夢である…

ここが現実にある土地なのか今はわからない…だが自分を知る手掛かりはこの夢しかない…

「私は…いったい何者なの…」

第5話◆本当の自分…◆（後書き）

夢の舞台は実在する土地です。東海三県のどこかです…

第6話◆夢の舞台◆

「記憶がない？」

「うん…」

「え？マジなの？」

「うん…」

翌朝、長谷川美奈は岡田和也を食事に誘った。全てを話すつもりだった。自分に小さい頃の記憶がない事、そしてあのおどましい夢の事を…岡田にだけは知ってほしかった…

周りを見るとカップルと思われる男女が楽しそうに会話している中2人だけ会話がなく重い雰囲気だけが流れる。どれ位の時間が流れただろうか…数分…いや数秒だったかもしれない。岡田はこの沈黙が耐えれなくなったのか前に置かれた料理を手を持った

「食べようか？」

「うん…」

2人の間にはカチャカチャというフォークの音だけが聞こえる。テレビの音、ウェイトレスの声、カップルたちの会話…何ひとつとして耳には入らない…

「……………」

「……………」

考えてみれば美奈は岡田に自分の事を話したことはなかった。勿論他の人にも話したことはない。初めて自分の事を知ってほしいという男性に巡り会った：

岡田和也：彼にだけは長谷川美奈という人間を知ってほしい。

「……………」

「……………」

たしかこの時頼んだメニューはペペロンチーノだったと思うが味は全く覚えてない。まあそんな事はどうでもいいことではあるが：

「……………」

「……………」

2人は無言でペペロンチーノを食べる。この時岡田は何を思っていたのかはわからない。

ただこの岡田和也という人間も孤独な過去を持っている：

岡田は美奈と同様に両親の顔を知らない。岡田は生まれてからすぐにコインロッカーに捨てられたのだ。当時この話題はニュースにもなったので知っている人もいるかもしれない：

テレビによれば母親は我が子の脳性麻痺による障害を受け入れられなかったのでは？：と言っていた：

岡田は生まれてからずっと施設で育った。施設ではイジメられることもなく不自由なく育った。でも親がいない現実、自分を捨てたと言う現実：

辛かった。自分を捨てた親が憎いこともあった。

親を知らない岡田と親の記憶もスープ街の記憶意外ない美奈…どこか通じる物があったのかもしれない…

「……………美奈ちゃん、自分の過去が知りたい？」

「うん…」

「たとえどんな辛い過去だったとしても？」

美奈はこの岡田の問いに言葉が詰まった。記憶が無くなる程の辛い過去かもしれない。知らないほうが幸せかもしれない。だが美奈の気持ちは固まっていた。自分はどんな人間なのか知りたい。過去が知りたい。

「うん…どんな辛い過去だったとしても知りたいの…自分がどういう人間なのか知りたい…」

「わかった…僕で協力できる事があればなんでもするよ」

美奈は岡田にあのおぞましい夢…刃物を持った男に追い掛けられる夢を自分の知っている限り話した。岡田は黙って聞いている…

「私はこの夢が過去に関係しているように思うの…和也さん…どう思う」

「そうだね…もし夢の舞台が特定できれば何か分かるかもしれないね…」

「……………」

「美奈ちゃん…もしかしたらその夢の舞台わかるかもしれない…」

『!』

美奈は岡田の顔を見た。まさか知っているとは思わなかった…さらに岡田は話しを続ける。

「夢で見た大きな道路沿いの森に囲まれた公園…そして噴水、歩道橋…ひとつだけ知ってる、まさかと思ったけど…」

「どこなの？」

「名城公園」

岡田は静かに答えたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5868d/>

伝説の風俗嬢

2010年10月26日14時50分発行